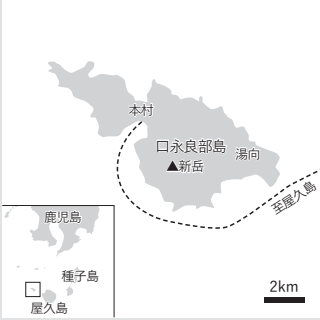
鹿児島県屋久島町

地域コミュニティによる火山災害への対応

鹿児島県屋久島町口永良部島（くちのえらぶじま） 貴舩 森

二〇二四年元日に発生した能登半島地震において、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様の日常生活が一日も早く戻られますことを願います。同じ離島住民として被災された石川県舳倉島の皆様が大変気がかりでなりません。

私が住んでいる口永良部島は島全域が国立公園に指定、ユネスコエコパークに登録され「緑の火山島」とも呼ばれます。二〇一四年八月三日、三四年ぶりに新岳が噴火しました。そして、その翌年の一五年六月二九日に大噴火が発生し、日本で初めて、最大の噴火警戒レベル五が発令、その日のうちに全住民が島外へ脱出避難となりました。この大噴火によって一名が負傷しましたが命に別状はなく、家屋などの被害もありませんでした。その後、屋久島で七カ月ほどの避難生活を送り、同年一二月二五日に帰島が叶い、以後、島の復興と振興が進められています。今回お伝えする口永良部島での経験が少しでも皆様のお役に立つことを願っています。



■過去の被災時の検証と改善

日本全国、地域によって災害特性があると思います。それぞれの地域で歴史に刻まれた災害の記録は、次の災害に備えるためにとても大切です。口永良部島の歴史で分かる火山噴火の特性は、一度噴火が始まると数年続き、二度目からの噴火が大きくなる傾向があることです。二〇一四年の噴火は三四年振り。これだけ間が空くと島内にいる噴火経験者はわずかですし、噴火の歴史すら知らない人が大半でした。そこで

2014年以降、数年間たびたび噴火を繰り返した新岳（2019年撮影）。

次の噴火に備えて急いで資料を作成し、住民に周知しました。

その翌月・九月二七日には、長野・岐阜県境の御嶽山（おんたけさん）の噴火で多数の登山客が亡くなる災害があったことで、さらに警戒心が高まりました。この頃、島では気象庁による火山状況説明会が頻繁に行なわれていましたが、資料を配られても専門知識がなければ理解が難しく、気象庁職員の方に勉強会を開いて欲しいと相談しました。その結果、想定以上に興味を持って学ぶ方が増え、火山防災と減災の意識向上につながりました。

三四年ぶりの噴火では、さらにいくつかの問題が表面化しました。この噴火では噴煙が高台の集落を飲み込み、従来避難場所に指定されていた港の避難所近くまで迫りました。避難訓練通りでは危険だと考え、消防団の判断で火口から四キロメートル以上離れた高台への避難を呼びかけました。

また、消防団による避難誘導の見直しと避難拒否者の説得については、島の消防団員数は多いとは言えないので、地域住民の理解と協力が絶対的に必要です。周辺住民同士で避難手順の打ち合わせを行なってもらい、消防団の巡回と誘導手順、情報なども地域住民と共有しました。これは小さなコミュニティだからこそできる連携体制で、避難拒否者を出さないためにも重要です。地域に根付いた消防団員には、住民たちから一目置かれる団員が存在するものです。そのような団

2015年の全住民避難の際に屋久島から迎えにきた町営船「フェリー太陽」。

員を、避難拒否者の説得係として配置した事が功を奏し、翌一五年の大噴火では避難拒否住民を出しませんでした。人口の多い都市部や地域では、地区ごとに細分化して考えてみると良いのかもしれません。

二〇一四年は、運悪く台風が接近する中での噴火であったため、噴火と台風が重なる複合災害も考える必要に迫られました。島には警察署や消防署がないため有事の際は、すべて消防団が対応しなければなりません。しかし消防団員の多くが子どものいる世帯であったため、複合災害の懸念から消防活動に専念できる体制も考慮し、急いで屋久島町に避難所を設けていただき、子どものいる世帯や高齢者、不安のある方も含めて約六〇名に自主避難してもらいました。災害もなかったため、自主避難者は一週間後に無事に帰島しました。

その際に行なった聞き取り調査の結果をみると、高齢者と子どものいる世帯、単身者や若者グループなどでは、普段の生活スタイルやリズムが違うことから、避難当初は問題がなかったものの、日が経つにつれてお互い精神的ストレスが重なっていったことが分かりました。改善策として「高齢者および高齢者と同じ避難所でも問題ない方々」「子どものいる世帯や子どもがいても気にならない学校の先生などの方々」「高齢者や子どものいる世帯とは別になりたい単身の若者や友達グループなどで避難される方々」の、三グループに大まかに

振り分けることが重要だと考えました。

一五年の大噴火の際には、屋久島の避難所を三カ所用意してもらった事が幸いし、救助のフェリーが屋久島に到着するまでの間に、町役場職員と下船の手順や振り分け避難の内容を電話で打ち合わせしました。船内では、高齢者から優先で下船し迎えのバスに誘導する手順などを説明。この手法が極めて有効に機能し、避難所への誘導がスムーズに完了しました。振り分け避難によって避難所での精神的負担が少なく済んだことに加え、避難先への物資の分別配布も行ないやすいなどのメリットがありました。

■七カ月の屋久島避難生活

二〇一五年の大噴火では、大して貴重品や着替えも持たず、着の身着のまま屋久島避難所へ脱出した口永良部島の住民が大半でした。誰もが、数日で帰島できると考えていたからです。そのため「数年は帰島できない可能性がある」とのニュース報道では、大混乱となりました。「コミュニティが崩壊する」という、誰もが想像のつく最悪のシナリオが、不安や不満、怒りとして噴出したのです。突然の島外脱出で、家の戸締りすらせずに避難した住民がほとんどで、飼い犬や飼い猫を連れ出す余裕すらない状態のなか、先の見えない不安な避難生活が始まりました。

一日も早い帰島を目指し、避難後すぐに漁船を借り上げて数日おきに消防団や役場職員、警察、自衛隊とともに島に渡り、置き去りとなったペットの救助や鶏、畜産牛の管理を続けました。同時に、避難生活が長引く可能性はありながらも、町消防団、町役場、消防署、県防災課、九州電力、日本赤十字社、海上保安庁、警察、自衛隊、気象庁、内閣府などのあらゆる関係機関・組織と連携して住民の一時帰島の準備を進めました。これには台風に備えての戸締りや家の片付けを行なってもらい、いつでも家を使用可能な状態に保つ目的がありました。その後、住民の一時帰島が認められ、避難所の改修工事、気象庁による火山観測監視体制の強化なども進んだことから、同年一二月二五日に一部範囲を除いて帰島が叶いました。

■全島避難がもたらした団結

島には本村（ほんむら）区と湯向（ゆむぎ）区の二つの地区があります。帰島後すぐに両区による臨時総会を開催し、帰島した住民の総意で「口永良部島復興委員会」の創設が決まりました。幸いにも口永良部島は全国から多大な支援をいただいていたため、その支援金などを基に島の再興を目指すこととなりました。委員会

メンバーを決定し、日々協議を重ね、二〇一六年末に「第一次屋久島町口永良部島復興と振興計画――口永良部島の復興と振興」が完成し、翌一七年から一〇年計画で進めています。

口永良部島の掲げる基本理念を「人々の豊かな営みが永々と続く口永良部島」とし、「人」「生活」「産業」「環境」を柱に立てました。大切なのはこの四つの柱をつなぐ理念「みんなで価値を知ろう」「みんなで理解していこう」「みんなで共有していこう」「みんなで口永良部島を作ろう」です。これらの理念は、帰島に向けて団結した共有の価値を参考に作成しました。きっかけとなったのは、テレビや新聞などメディアからの質問です。「また大噴火をする可能性がある危険な島になぜ帰りたいのですか？」「島の良いところは何ですか？」「島が好きな理由は何ですか？」といった質問が多く、住民にとって、自分自身や自分の住む口永良部島のことを再認識させる契機となりました。また振興のための大切な資金を柔軟に活用するために「島づくり支援金事業」「復興及び生活支援基金」を設置しました。幅広く事業を行なえるようにしており、現在は、津波避難道の新設事業や定期管理事業費としても活用、今後は避難所の備蓄品の入れ替えなども計画しております。

今年で二〇一四年の噴火から、一〇年の節目を迎えます。新岳は、二〇年四月を最後に現在まで静穏状態が続いていますが、時折発生する火山性地震によって道路などの復旧工事が中断され、未だに復旧中であるのが現状です。また年ごとに重ねて発生する台風や大雨、新型コロナウイルスなどが、復旧工事や復興・振興策の足枷となっています。避難所の物資は、住民数より余裕を持って確保し、三～四日分の量を備蓄していますが、使用期限もあるので順次入れ替えが必要な状況です。

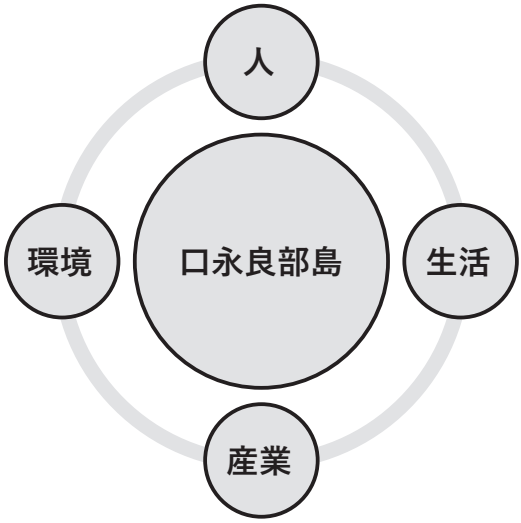
噴火以前一三五名程いた住民も帰島時は一〇〇人程に減少しました。その後現在まで、亡くなられる方や島を離れる方などがいる一方、移住者や親子留学による社会増もあり、人口は維持できています。しかし、噴火経験がない方々が増えつつあることが課題で、帰島後も学校の避難訓練は続けられていますが、住民全体の避難訓練は十分に行なえているとは言えません。消防団の訓練も同様の状態であるため、早急に、噴火、津波、風水害などの避難訓練、防災と減災のあり方を再検討する必要があります。

常に災害に対するモチベーションを保ち続けることは難しいですが、必要最低限の備えや準備、防災訓練を通じたコミュニケーションを絶やさず、時には災害の歴史も掘り起こしながら、コツコツと無理せず継続していくことが大切なのだと思います。■

島での避難訓練の様子。

口永良部島が掲げる基本理念

『人々の豊かな営みが永々と続く口永良部島』



口永良部島をつくる4つの柱
人・生活・産業・環境

口永良部島をつくる輪
「みんなで価値を知ろう」
「みんなで理解していこう」
「みんなで共有していこう」
「みんなで口永良部島を作ろう」

貴舩 森（きぶねもり）
口永良部島出身。幼少期の一〇年を島で暮らし、その後島外で引っ越しを繰り返し二六歳で帰島。二〇一六年から本村区長。現在は区長を退き、二一年から一般社団法人火の島代表理事として、島内唯一の商店「くちのえらぶ商店」を切り盛りしている。